

---

# IS ~インフィニット・ストラトス~ もう一つの世界

悠月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス） もう一つの世界

### 【Nコード】

N0316R

### 【作者名】

悠月

### 【あらすじ】

ある日自動車ひかれかけた少女を助けて亡くなった彼女。

女神により他の世界に転生した彼女の名前は『織斑春香』彼女は『織斑一夏』の妹だった。

二人は仲良く成長し『IS学園』に入学する。

## 0話 #1 「突然の死、そして転生」

0話 1 「突然の死、そして転生」

私は車に轢かれかけた女の子を助けて自分が車に轢かれてしまい直ぐに病院運ばれた。

ある病院で一人の少女が最期を迎えようとしていました

医師が少女の脈が停止し画面を確認し両親に『ご臨終です』と告げました

「いや！？ねえ、目を覚ましてよ。 お願いだから！ ねえ！」

2

姉は少女の体に縋りついて泣き、両親は声を殺しながら涙を流しました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「……………」

「……………なさい」

「誰？私を呼ぶのは」

彼女は眼を覚まし、声のする方へと目を向けます

「……………目を覚ましましたか」

「……………誰？」

そこは一人の女性がいるだけで他には何もない空間でした。

「私は貴女方が言う女神の一人です」

「ふ〜ん、そうなんだあ」

「驚いていませんね（苦笑）」

「だって、私、死んじゃったとおもつから。ここは、やっぱり天国？」

「いいえ、違います。ここは神界です」

「神界ですか……………？」

「はい」

「大変申し上げにくい事なのですが……」

「はい」

「実を言うと、貴女が死んだのイレギュラーだったのです」

「え？」

「あの、どういう事でしょうか？」

「はい、あなたが救った少女が本来亡くなるはずでした。しかし、貴女はその少女を助けてしまった……」

「それはそうでしょ！？あの子もう少して車に轢かれるところだったんだよ!？」

「しかし、それはあの少女の運命でした。結果あの子は生き残り、あの子は100歳まで生きる事になりました。」

「よかった…私はこのまま天国？それとも、地獄？」

（親やお姉ちゃんを悲しませた・・・地獄かな？）

「いいえ、貴女の死は先ほど言いました様にイレギュラーです。その、貴女の他人を思いやる気持ち等を考慮し、貴女が望む世界へ転生し、そこで次の人生を過ごしてください。」

「良いんですか？別世界って何所でも良いんでしょうか？ 例えば、漫画やアニメの世界とか」

「はい、何所でも好きな世界を言ってください」

「じゃあ“IS・インフィニット ストラトス”の世界をお願いします」

「はい、わかりました。 それでは、その世界に送りますので、そこに立つてください」

「はい」

少女が指示された場所に立つと、目の前に扉が現れました

「あなたに幸あれ・・・」

少女は女神の言葉に頷き、開いている光あふれる中へ歩いて行った。

作者「はじめまして>m) ( m<作者の悠月ゆづきと申します。 ISの2次創作をやってみようと思いいPCに向かっています。」

??「初めまして、主人公の・・・あれ?」私まだ名前もらってない!」

悠「うん。名前はこの次の0話 2でつくよ。」

??「ふ〜ん」(怪しい...)

悠「なんだよ！その目は！それならこっさり教えてやる」

「うん、うんよ〜」

??「ええっ！！ホント！？」

悠「うぬっ」(コケン)

??「は・早く次イコ！！」

悠「焦るな、では、皆様、つたない文書ではございますが、一生懸命書いていきたいと思しますので、これからよろしくお願いします。

「

0話#2 「初めまして、姉さん、兄さん」

0話#2 「初めまして、姉さん、兄さん」

とある産婦人科でもうすぐ新しい生命がする。

< ウロ ウロ ウロ >

「お父さん落ち着いて」

「千冬」

(うるさい)

「おぎゃ〜」

！！！！

ガチャ

『織斑さん、オメデトウございます！双子のご兄妹ですよ。』

『あっありがとうございます！』

病室

「一夏、春香でどうかな？」



「いい名前ですね。」

「千冬はお姉ちゃんだね。」

3人は生まれたばかりの新しい家族の二人をみていた。

『……か』

誰かが頭の中で話しかける。

『?うゝ』(誰?)

うまく声が出ない……当たり前か、赤ん坊だし

『私です』

『女神様?』

『はい。そうです。ちゃんと転生できたようですね。あなたはこれからこの世界で生きていくことになります。』

『はい』

『では、貴女の能力について説明します』

『(え?)』

『貴女には私から能力を授けました』

『あ・ありがとうございます』

『どうされました？』

『ちょっと驚いただけです。』

『・・・能力の説明をしたいのですが、よろしいですか？』

『あ、お願いします』

『一つは完全記憶能力です』

『一つってことは能力があるのかな？』

『次の能力は超能力です』

『（超能力・・・）』

『超能力：サイコキネシス念動力・サイコメトリー接触感応・テレパシー精神感応の3つです』

『（はい）』

『では私はこれで・・・貴女にこの先、幸ありますように』

そして時間はながれ

私と一兄は高校入学した

0話#2 「初めまして、姉さん、兄さん」(後書き)

悠「0話終了です」

春「です!」

悠「双子です・・・べたです」

春「だね。しかもこれ『プラットフォーム』あるでしょ?」

悠「…参考はあるよ(汗)ごめんなさい。」

春「これからどうなるの?」

悠「うん…原作にそっていきながら、手を加える感じかな」

春「フーン 仕事もあるのに頑張るね」

悠「正直 不安」

## 1話 #1 高校生活開始！

『IS』 インフィニット・ストラトス 正式名称

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ  
しかし、『製作者』の意図とは別に宇宙には進まず、『兵器』  
スポーツ』へと落ち着く。』

しかし、『IS』には欠陥があった。

『男性は使用できない』

正確には女性以外には機体が反応しない。

『IS学園は、ISの操縦育成を目的とした教育機関。その運営、  
資金は原則日本国が行う』中洛 また、入学に際しては協定参加国  
の国籍を持つ者は無条件に門戸を開き、日本国での生活を保障する。

『 IS運用規定抜粋

### 1話 #1

兄、織斑一夏と私、織斑春香はIS学園に入学しました

二人で教室に入ると……

ん？なんだか変な緊張感がありますね。

「春香……」

「何ですか？一兄」

「俺、凄く見られてる？」

「そうですね……見られてますね。」

兄の一夏は高校入試の時に間違つて、『IS』を動かしてしまつてIS学園に入学させられてしまいました。

『一兄あきらめてくださいね』

『あゝそうだね……』

兄は私の能力をしっています。

「全員揃ってますね。それじゃあSHRはじめマース」

副担任の山田真耶先生が席に着くように促します。

なんか『子供が背伸びしている』って感じですね。服のサイズや眼鏡（黒縁）があっていない。

「それではみなさん1年間よろしくお願いしますね」

「……」

反応が薄いですね。無理もないですよ、教室に居るはずのない男子が1名いるのですから・・・

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと・・・出席番号順で」

(うわ、一兄に視線がバシバシ向いてますね)

「…クン。 織斑君」

「は、はい」

一兄も緊張しまくりですね。誰ですか？くすくす笑っているのは！

「えーっと織斑一夏です。よろしくお願いします。」

「……………」

こらー！一兄の前の席の女子！そんなあからさまに『もっと聞かせて』！  
視線を送らない！ああっ！一兄がテンパってる。

「以上です！」

がたたつ。

ずっとけている女子が数名いましたね。どれだけ期待してるんですか？

『スパーン！！』

「いつ　!？」

「お前はもうちょっと気の利いた事が言えんのか？馬鹿者！」

出ましたね・・・ツンデレ姉の千冬姉、顔が若干にやけてますよ？

「…関羽!？」

『スパーン!!』

「誰が三国志の英雄だ！」

「千冬姉」

『スパーン!!』

「学園内は織斑先生と呼べ！」

千冬姉が山田先生にクラス挨拶を押し付けた事を謝罪している。

「副担ですこれくらいはしないかと…」

「うむ！諸君！私が織斑千冬だ。よろしくたの」

挨拶そこそこに千冬姉の挨拶は黄色い声でかき消された。

「キヤー　千冬さま、本物の千冬様よ！」とか

「ファンです!!」とか



「私、お姉さまのためなら死ねます。」

本当に死ねますか？

「……五月蠅い！！黙れ！小娘ども！！」

千冬姉は一喝すると直ぐに静まる。

「次！名を名乗れ！」

やれやれ……あの千冬姉がこんなに崇拜されているなんて考えられ  
ません。

と考えながら、席を立ちます。

「はい……織斑春香です。そこにいます。織斑千冬、一夏は私の姉兄  
です。一兄バカにしたり、危害を加えたら許しませんからね。それ  
と、誰を選ぶか兄次第なので私に取り入ろうとしても無駄ですから」

「織斑君達ってあの千冬様の兄妹………？」

「それじゃあ、世界で 唯一男で『IS』を使えるのもそれが関係  
して……」

「代わってほしいです！」

最後のは聞かなかつた事にしましょう。

興奮冷めやらぬ教室で低温の視線を感じます。

視線の方に目を向けると、幼馴染の篝ちゃんがこっちをみていました。

未だに一兄の事が好きなんですね。

キーンコーン

「SHRはこれで終わりだ。諸君にはこれから半月でISの基礎を覚えてもらう。その後は実習だが、これも、基礎動作を半月で体に染み込ませる。いいなら返事しろ。よくなくても返事しろ。私の言葉には返事しろ。」

・・・鬼ですね千冬姉後でお話し確定です。

私は千冬姉に凄みをきかすと、千冬姉は一瞬震えてから教室を後にしました。

1話 #1 高校生活開始！（後書き）

悠「こんばんわ」

春「こんばんわ」

悠「基本は小説に沿ってるんですが、少しアレンジを加えています。」

春「そうですね。ところで」

悠「はい？」

春「一兄は誰と恋人同士になるんですか？」

悠「言えません！」

一夏「あ〜」

悠「一夏どうした？」

一「いや・・・早く本編へ行ってくれ」

悠「しばし待ってくれない？」

一「シャ・・・」

バキッ！！！！！！！！

—「ぎちゃ〜」パタッ

春「一兄!」

悠「先走るな阿呆が!」

春「……ちょっと来て下さい」(ニコッ)

悠「やだ」逃げ……

春・千冬「良いから来い」バキッ!

悠「んぎちゃ〜」パタ

## 1話#2 姉、兄、妹

1話#2

キーンコーン・カーンコーン

1時間目の『IS基礎理論』が終わりました。

しかし、入学初日から授業ですか・・・学校案内は・・・この（しおり）の校内地図を見ろってことですか。

「なあ春香…どうにかならないか？この状況」

「一兄、私にどうしろと？いくらなんでも無理です。」

「だよな・・・」

ちなみに『世界で唯一ISを使える男性』こと、一兄は世界的にもニュースになり当然学園関係者から在校生みで知っています。というわけで現在、廊下には他のクラス女子から2、3年生の先輩方までクラスに詰めかけています。

「あ、あの織斑さん」

「私の事は春香と呼んでください。一兄と間違えてしまうので」

「そうだね。春香ちゃんあのね？一夏君は・・・」

「一兄の事は本人に聞いてくださいね」（ニコリ）

ヒッ！

あらら、ちょっと凄みをきかせ過ぎましたね、涙目になっていますよ。

「織斑兄妹ちよつと来い！」

千冬姉……いえ、学園では織斑先生ですね。ドア越しに呼んでます。

回りの生徒は千冬姉の事を尊敬の目でみてますね。

「「はい。」」

場所は変わって『生徒指導室』

「そこに適当に座れ」

私たちは、適当に座ると……

「一夏、春香……ごめんなさい！」

「どうしました？織斑先生」

「春ちゃんこの場はちー姉と呼んでいいのよ。ここの会話は聞こえないから」

「はい……織斑先生」

呼んであげません。さっき一兄の頭を散々叩いた罰です。

「一君、春ちゃんがいじめる」

「春香・・・千冬姉をいじらない」

「はい」

「そつだよ！姉さんを ヒッ！」

「春香！言ってるそばから、んで、千冬姉苦しい・・・」

ぷいっと横を向いて抵抗です。

「だって、春ちゃんが怖いんだもん。」

ちー姉：千冬姉さんは私たちの前では基本「甘えた」です。他の人が居るときは教室の様に鬼なのです

「千冬姉、ところで話は？」

一兄は話が進まないと思ったのか、強制的に呼ばれた理由を聞きま

す。  
「えつとね、あなた達は双子でも珍しいタイプだから、色々とサンプルを取らせろって上から言われてるの。協力してくれるかな？」

「協力って？なにすんのさ千冬姉」

「うっんデータとかかな」

「フーン。いいか春香？」

「一兄がいいなら私はいいですよ」

一兄のためならです。

だつてさ、千冬姉」

一兄はにっこり笑つて千冬姉をみます。いいなあ私にもその笑顔をしてください

「ありがと〜二人とも！後、学園内ではきつくあたるけど我慢してね」

「わかつてるよ千冬姉、なっ春香」

「はい。ちー姉はIS界では有名ですから、私たちの事も一般生徒として扱ってくださいね。だけど、一兄にひどい事したら許しませんよ？ちー姉」

「一君〜春ちゃんが怖いよー」

キーンコーン

「予鈴が鳴つたわ、さっ二人とも教室に戻りなさい」

千冬姉が甘えモードから大人モードに切り替わったようです。

「「はい」」

私たちは返事をし教室へ戻りました。



1話#2 姉、兄、妹（後書き）

オラ〜!!!

悠「痛い！モノ投げないで！（><）・・・ち・近寄るな〜」

春「こんばんわ、春香です」

一「こんばんわ、一夏です」

千「織斑千冬だ」

春「作者が凹られているので私がここをしきります」

一「ああ〜千冬姉のイメージ壊したからか？」

春「みたいだよ」

千「粛清されてあたりまえだ！」

春「ちー姉・・・」

千「な・なんだ春香（汗）」

一「春香！」

春「このISでは千冬姉は基本甘々です」

千「なっ！」（言っちゃだめだよ。春ちゃん！）

悠「ハアハア・・・ふりきった」

一、春「あ帰ってきた」

悠「おう！帰ってきたよ」

一「うしろ・・・」

悠「へっ?」

千「き・貴様~~~~!!!!私の~~~~!!」

悠「ま・まで!はなしを・・・ぎゃ~~~~」

一、春「あッ!死んだな」

第「私いつになったらでれるの?」(シクシク)

1話#3 幼なじみ(前書き)

桜ノ宮ゆきのしん様 感想ありがとうございます。  
これからも、ご指摘等ありましたら宜しく願います。

この回から少しづつ原作からずれはじめます。(文章とかヒロインズ達の行動、言動など)

「こんな違う!」と思われるかは「戻る」を押してくださいね。

# 1話#3 幼なじみ

1話#3

?—夏視点?

俺、織斑一夏は授業が終わって、女子たちの視線に戸惑いながら休み時間を過ごしています。

クラスの女子たちは、俺と視線が合うと慌ててそらす。けど、『話しかけてほしい!』のオーラを放ちながら・・・

『誰かこの状況を助けてくれ・・・』

そんな事を思いながら額を机につけていたら一人の女子が声をかけた。

「・・・ちよつといい?」

「え?」

俺は顔を上げるとそこには6年ぶりに会う幼なじみの箒が立っていた。

「・・・箒?」

「・・・」

機嫌が悪そうに見えるが目は生まれつきと本人は言う。

まあ、俺が嫌われている可能性もあるのかな?

「そついえば」

俺は思い出した事があって、俺から話を切り出した。

「なに？」

「去年の剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「なんでそんなこと知っているのだ」

「新聞みたし・・・」

「新聞なんかみるなっ」

箒さん？それは無理ですよ。俺だって新聞は読むよ。

「あーあと」

「今度はなに！？」

「久しぶり。6年ぶりだけど箒ってすぐにわかったよ」

「え・・・」

「髪型変わらないし」

「よ、よく覚えているー」「あつ、箒ちゃんだ！」「」

言いかけている途中で春香が帰ってきた。

「は、春香……」

「春ちゃんって呼んでくれないの？」

「な！そ、それは二人だけの時……！」

篝が照れている。俺が篝の方を見ていて、篝と目が合ったとたんに

ギロリ。

睨まれてしまった。

キーンコーンカーンコーン

「席に着け！」

チャイムと同時に千冬ねえ……織斑先生が入ってきて、短い時間の幼馴染との再会は終了した。

1話#3

幼なじみ（後書き）

悠「うん」

春「どうしたの？」

悠「いや、軽い気持ちで初めて見たんだけど…難しいなって…ね」

春「ふん…もうなげるの？」

悠「いや、やれるところまでは頑張るよ」

春「原作読んで、日も浅いもんね」

悠「それは言い訳にならないよ」

春「なら、がんばなさい」

悠「ぼちぼちとね」

# 1話 #4 イギリス代表候補生（前書き）

ご無沙汰しています。

先月まで仕事が忙しく、なかなか更新できずにいました。

そして、先月の11日あの震災で、宮城の知人が震災にあい無事が確認出来てホツとした所です。

震災にあわれた方々にはお見舞い申し上げますm（　　）m

皆さんは1人では有りません！頼ってください。恥だと思わないで下さい。

これは、私が阪神大震災に遭遇した時に聞いた言葉です。

何気ない一言ですが、こんな時はお互い様です。協力して行くのが当たり前なんです。政府は確かに色々してくれますが、末端までは届きません…ですから皆さんお互い様精神で頑張ってくださいませうね。



# 1話 #4 イギリス代表候補生

先ほどから一兄は頭に「？」を浮かべてます。まあ、入学前に渡された参考書を古い電話帳と間違えて捨ててましたからね。

山田先生は一兄が隣の女子に聞こうとして見ている所を見ていたのですよ

「織斑くん、分からない所は有りますか？」

「先生！」

「はい、何でしょう？」

山田先生「…こういう時の一兄は気をつけて下さい？」

「全然分かりません！」

ほらね（笑）

「え…？全部ですか？」

あらら、山田先生がひきつってますよ…

「え・えーと今の所でわからない人はどの位いますか？」

シーン

「織斑兄、入学前に渡された参考書はどうした？」

「…手違いで捨ててしまいました」

パンツ！！

「必読と書いてあっただろうが！馬鹿…者」

ちー姉さんがこちらを見て叱ってるのですが、私が何時の間にか黒オーラを出していたみたいで、最後の方は凄みが有りませんでしたね、けど、後でちー姉さんとはお話が必要ですね。

「あ・後で再発行してやるから一週間以内で憶えろいいな！」

ちー姉さん、冷汗流さないで下さい。皆が不思議がつてますよ？

「…はい。やります」

ちー姉さんはISの事になると鬼ですね

休み時間

「ちょっとよろしくって？」

「へ？「はい？」」

声を掛けてきたのはブルーの瞳、地毛の金髪が鮮やかな女子生徒

「セシリア・オルコットさんですね」

「貴女に声をかけたのではなくてよ。織斑春香さん。私はお兄さんの一夏さんに声をかけましたの」

私は少しムツとしていたのを一兄さんが気が付いて

「何のようだ…えーっとセ・セシ…」

「セシリア・オルコットですわ！イギリスの代表候補生にして、入

試主席のこの私が声を掛けたのですよ？名前くらい…』あつ春香知っていたか？』…」

「一兄…このての相手は途中で話を切られると後が厄介ですよ？」

「あ、あなた方…！」

「まあ、いいや！それで、代表候補生って？」

「本気でおっしゃってますの？」

「おう！知らん…！」　そんなはつきり言っで一兄は…

「……………」　セシリアさんが何やらブツブツと言ってますがほっといて今のうちに一兄に代表候補生について説明しておきましょう。

「…ふーんそうなんだ」　全く興味なしですね

「で？その代表候補生様が俺に何の用で？」

「ふんつ　　ISの事で分からない事があれば教えて差し上げてもよろしくてよ？なんせ私は入試で唯一教官を倒した…」

「教官なら俺も春香も倒したぞ？なあ春香？」

「はい、倒しましたよ？けど、一兄の場合は倒したというよりかわただけですけど」

「はい？私だけと聞きましたけど？」

「勘違いじゃないのか？」

ピシッ

「つまり、私だけではないと?」

「そうなりますね」

「貴女!教官を倒したと仰るのですね!」

あれ?何時の間にかセシリアさん私に指をさして喋ってますね

私は咄嗟に

「セシリアさん取りあえず落ち着いて下さい」

「落ち着いてなごー」

キーンコーン あっ!チャイムだ!助かったのかな?

「……!後でまた来ますわ!春香さん!逃げないで下さいね!……よ  
くって!」

助かりませんでした(涙)

1話 #4 イギリス代表候補生（後書き）

少しづつ原作から外していきます。

違うと思った方には、ごめんなさいm（ ） m

悠 「久しぶりの更新です。」

春 「こんにちは。春香です！・・・ねえ？」

悠 「な・何かな？」

春 「こんなに遅れたのは？」

悠 「仕事が決算時期とPCが逝っちゃった（泣）」

春 「買ったばっかなのに？」

悠 「うん・・・コーヒーこぼしてしゃかった」

春、千、一 「うわ〜」

セ 「私の登場が・・・（泣）」

悠 「セシリアは登場編は少しアレンジ加えるよ。原作にそって  
行くけど・・・」

篤 「私はあれだけか？（怒）」

悠 「...今の所〜ぎゃ〜〜」

春、一、千、篇、セ

「これからも、宜しくお願いします」

鈴、シ、ウ

「私たちは~~~~~」

悠 「当分先……ぎゃ~~~~~」(パタ)

1話 #5 決闘(前書き)

春 「どうしたの？」

悠 「なんとなく」

春 「お楽しみください」

悠 世界違つと思つた方は『ごめんなさい』戻ってくださいね。

## 1話 #5 決闘

次の時間山田先生ではなく、ちーねえ『織斑先生』が教壇に立っています。よほど大事な時間なのか山田先生までノートを持っていますね。

「授業に入る前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を先にきめるぞ」

クラス対抗戦・・・代表者ですか・・・

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく生徒会の会議、委員会への出席・・・まあクラス長だな」

教室がざわつく、すると先生は『パンパン!』と手を叩いて注意する。

「ちなみにクラス対抗は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。一度決まると、一年間変わらんからな!」

教室内が先ほど以上にざわめいています。例によって一兄は意味が分からん! って顔をしていますね。まあ私も避けたいですね。

「はい! 織斑君『さん』を推薦します!」

んなっ! 誰ですか? 一兄を推すのは!

「私も織斑くん『さん』を推薦します」



「私も織斑一夏を推薦する！」　こ・こら篝ちゃんこんな時にさり気なく自己主張しないでもつとほかの時に頑張ってくださいよ。

「お・・俺！？ 私ですか！？」

「織斑兄妹。席に着け邪魔だ。他はいないか？ 自薦他薦は問わないぞ？ 居ないのなら二人の決選票決定にするぞ？」

「ちー姉さー 織斑先生だ」　・・・　織斑先生ちよつと待ってください！ 私は拒否しまー 納得いきませんわ！！」

『パンツ』と机を叩いて立ち上がる生徒が一人　・・　やつぱり出ましたかセシリアさん

「そんな選出は認められません！ 男がクラス代表にだなんて、いい恥さらしですわ！ この私に屈辱の1年間を味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアさんもつとー　・・　つてあれ？ 一兄を馬鹿にしてる？

「実力からいけば、わたくしが代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にまれては困ります。私はIS技術の修練に来ているのです。サーカスをする気は毛頭ありませんわ！」

・・・　一兄を『猿』扱いましたね（怒）

『バキッ』

「？ 春香さんなんか音しなか〜…ヒッ」

「織斑先生ー」

「ん？どうした織斑いもう・・・」 タラリ（春ちゃんが怒ってる）  
（泣）

「私とセシリアさんとで決選対決させてください。こんな人を一度叩きのめしたかったので」

私の表情を見たクラス人は顔を引きつらせてます

『こ・怖い』

「あ、貴女！私を侮辱しましたわね！」

「あら？自覚がおりなんですか？」

仕方ありません。回り出した歯車は止まりませんね。

「「決闘です（わ）！！」」

「言っておきますけど謝るのなら今のうちですわよ？今でしたら、私許してあげてなくてもねいのですわよ？」

「お断りします！」『プイッ』

「まっ！貴女！！貴女が負けた時は私のこま使いにしますわよ！？」

「・・・良いですよ。私が勝った時には一兄に謝って『猿』を撤回させていただきますから！」

「いいですわよ。万が一にも私が負けることはありませんから。それにちょうど良いですわ、イギリス代表候補生のこのセシリア・オルコットの實力を示すまたの機会ですわ」

「そうだ、貴女は代表候補生ではありませんから、ハンデを差し上げますわ」

「いりません！」

「あら？よろしいの？」セシリアさんはさっきまでの激昂はなく、明らかな笑味を浮かべてる。

『腹たつな』

「ねー春香さん。今からでも遅くないよ、ハンデ付けてもらいなよ？」

前の席の女の子が気さくに声をかけてくれました。けど、その表情は憐みの表情を浮かべてました。

その表情に私は遂に『カチン！』と来てしまい・・・

「い・り・ま・せ・ん」（にっこり）

「春香さん、女子だしわかってると思うけど、相手は代表候補生だよ?」

「それがどうかしましたか?」

確かに彼女が言う様に代表候補生と一般生徒とでは力の差ははっきりしている。

けど、一兄を馬鹿にし猿扱いしたのは許せない!

「話はまとまったな。勝負は1週間後の月曜日。放課後第3アリーナを使用して行く。織斑妹とオルコットはそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

「春香……」と呟く一兄……

「春ちゃん……」と気に掛ける篝ちゃん

とにかく!この1週間で私はやれる事をやる!そして、セシリアさんに勝ってみせる!

こうして、私ー織斑春香とセシリア・オルコットとのクラス代表とプライドをかけた戦いをする事が決まった。

1話 #5 決闘（後書き）

— 「なあ？」

悠 「ん？どうした？」

— 「俺はどうしたらいいんだ？」

悠 「春香を応援しろ」

— 「・・・」

春 「はあ」

セ 「ハア」

悠 「春香は基本、性格悪くないです。ただ、一夏が絡むと我を忘れます」

セ、春「わたくし（私）、春香さん（セシリア）と仲たがいたくないのですが・・・」

悠 「大丈夫、ちゃんと仲良くさせるから安心せい！」

という訳で、これからも宜しくお願いします。

1話 #5・5 (部屋割) (前書き)

悠「ふ」

春「どうしたの？」

悠「春香のISの機体名をどうしようかなってね」

春「いい名前付けてね？」

頑張ります。

1話 #5.5 (部屋割)

「」「」「」

放課後、一兄と私は机の上でぐったりしています。

どうして? ってそれは・・・

「い・意味が解らん・・・。なんでこんなにややこしいんだ」

「い・一兄・・・ひど過ぎですよ・・・」

一兄に勉強を教えつつ、セシリアさん対策を考えようと思ったのですが、一兄が全く理解していなかったので、最初から教えることになり、結局今日は、対策を考えられませんでした。

ちなみに、”一兄見学”は放課後になっても変わりませんでした。他学年、他クラスの女子らが押しかけ小声で話し合ってますね・・・

『一兄は見世物ではありません!』

「一兄:今日はここまでにしませんか?」

「そうだな、ありがとう。春香」

一兄はそういって頭を撫でてくれます。

『本当に仲のいい兄妹ですね』

とか

『いいなあ、私もナデナデされたい』

などの声が聞こえてきました・・・（ダメですよ、撫でてもらえるのは私だけです）

「織斑くん達まだ教室にいたんですね。よかったです」

教室の入り口の方を見ると、山田先生が書類を持ちながら此方にやってきました。

「どうしたんですか？山田先生」

「織斑さんたちの部屋がきまりました」

「はい？」

「えーっと山田先生。部屋って寮の部屋の事ですよ？私たちは暫く家からの通学って聞いてますが？」

「そうだったんですが…事情が事情ですので一時的な処置として無理やり変更したらしいです。・・・織斑君たち政府から聞いてませんか？」

おそらく今まで前例がない『男のIS操縦者』の一兄とその妹の私を国…政府は保護と監視の両方をつけたいみたいですね…面白くあ



りません。

「そういう訳で政府の特命もあり、寮に入れるのを最優先したみたいです。1か月もしたら織斑君の専用個室の方が用意できますから暫くは相部屋で我慢してくださいね」

山田先生！一兄に近づき過ぎです！息がかかっています。

「先生、くすぐったいです・・・春香！先生を睨むな。部屋の件は分かりましたが荷物は一度家に帰って準備しなくてはいけないので今から帰って」「その必要はない！」「」

ちー姉さん…いつの間にかいたんですか？

「織斑兄妹、私が手配しといてやった。荷物はもう部屋に届いてるはずだ」

ちー姉さん…顔がにやけてますよ？いったいどんな部屋割をしたんですか？

「「あ・ありがとうございます」」

山田先生がカギを私たちに渡そうとしたときに『そうでした!』と  
思い出したように叫び一兄の方をみて・・・

「お風呂ですが、部屋にシャワーがありますが、大浴場もあります。  
ただ織斑君は使えません」

「え、なんでですか?」

『パシーンッ!』

「織斑先生、痛いです」

「ばかもん、織斑兄!お前は女子と一緒に風呂に入るつもりか?」

「あゝゝ・・・」

「私は一兄と一緒に構いませんよ」

「お、織斑さん!ダメです。いくら兄妹でも!」

山田先生はきやあきやあ騒いでいます。そして廊下では聞き耳をた  
てていた女子は『腐女子談義』に花を咲かせていました。

織斑先生と山田先生が教室を出ていくのを見送って私は一兄に「帰  
りましょうか?」とうながし、寮へと向かいました。

「そつえば春香は何号室なんだ?」

「1025号室ですよ?」

「…それ、俺と同じなんだけど・・・」

「「ええっ~~~~」」

ちー姉さん…

私は部屋の前に着いてカギを差し込むとー

「あれ？開いてる…」

「え？」

私たちは扉を開け中に入ると、中から『誰だ?』と声が聞こえました

この声…

奥から制服姿の篝ちゃんが出てきて、私たち3人は同時に

「「「篝?、篝ちゃん?、一夏と春ちゃん?」「」「

と声がかぶります。

ちー姉さん!!!!!!!!!!

「一夏!どう言う!」篝ちゃん!」「

「春ちゃん・・・はっ!まさか!」

篝ちゃんは誰の仕業か分かったらしく

「はい…そのまさかです」

「一夏！」

「お、おう…」

「ハア〜こうなっては仕方がない、二人ともよろしくたのむぞ」

「「こちらこそ、姉が迷惑をかけて「すまん」「すみません」」

この後、私たち3人はこの部屋での決まり事を作り、夕ご飯を食べにいきました。

えっ？ちー姉さんですか、もちろん『お話し』をしましたよ。そのあとちー姉さんは泣いてましたがそれは内緒です。（笑）

1話 #5・5 (部屋割) (後書き)

補足できなものです。

本来は一夏と箒ですが、ちょっと無理やり3人にしてしまいました。

一夏と箒は暫く疎遠になってましたが、春香と箒はあってはいませんが電話やメールのやり取りをしていたという設定です。

次は春香と箒、一夏が特訓を行うところへ持っていかれたらと思っています。

春「それは、悠月しだい」

悠「そのとおり!」

どうしよう…ってかISの機体名…本当にどうしようかな? (汗)

次回も宜しくお願いします。

## 中休み

どうも、こんにちは！悠月です。

今回はちょっとお休みというか、春香の事を書きたいと思います。

春「こんにちは。織斑春香です。」

悠「春香は一夏の双子の妹なんだよね？」

春「はい、そうですよ」

悠「軽く自己紹介する？」

春「いいですよ。改めまして、織斑春香です。誕生日は9月27日です。身長は155？、体重と3サイズは秘密です。趣味は千冬姉さんをいじめ〜『ケフンツ』どうしました？一兄さん」

一夏「春香…千冬姉をいじめないの」

春「気のせいです。悠月さん、後はお願いします」

悠「一『逃げたな』」

悠「仕方ない、春香は一夏の事が大好きです。あくまでも、兄妹の

大好きですよ？千冬さんの事も好きですよ、ただし一夏より、優先順位は下ですが…」

春「当たり前です。一兄が一番です！」

悠「うおっ！！」

春「女尊男卑がなんだと云うんです」

一「仕方ないよ、今は昔とちがうんだからな」

春「一兄を馬鹿にする人はつぶします」

悠「おいおい、この通り一夏を馬鹿にしたり、罵ったりすると、ブラック春香が降臨します」

春「…悠月さん？ちょっといいですか？」（ニッコリ）

悠「……ちょっと待て！話せば一っわああああ」

暫くお待ちください＞B（――）B＜



春「失礼しました。悠月さんは急用があるとかで、出て行かれましたのでここからは私がお話します」

千冬「ネエ？そで寝てるー」千姉さん？』…なんでもない！！」

春「そうですか？では、千冬姉さんは学園内ではキツイですが、姉妹の前では甘いです」

千「春ちゃん？それは言わない約束じゃないかな？」

春「そうでしたか？忘れました」

千「春ちゃん」

春「こないだ、一兄を叩いた罰です！」

千「一くん春ちゃんが」（泣）」

一「春香…夕飯ぬー」『ごめんなさい』

千「やい」

春「…（ジロツ）姉さん、お話ししましょうか？」

千「い、いや〜〜」

暫く、お待ちください

箒「一夏、春香、夕ご飯のーどうした？」

春「箒ちゃんだー」

一「もうそんな時間か？」

箒「ああ、今日は私が作ってみた／＼」

一「／＼／＼そうか」

春「一兄、箒ちゃん顔が赤いですよ？」

一、箒「なってない！」

春「そうですか？早くご飯食べましょーうよ。おなか減りました」

一、篤「そ、そうだな行こうか」

千「……………行つたか？」

悠「ああ…行つたぞ」

千「そうか。お前も大変だな」

悠「仕方ないさ」

千「それより、束の事だが……」

悠「すまん、今はまだわからない」

千「そうか…ところで、悠月、春香のISなんだが」

悠「…………もう少し待ってくれ、代表選考戦には必ず間に合わせるから」

千「たのんだぞ」



## 中休み（後書き）

春香の機体名ですが、∴募集したいと思います。

基本は『紅椿』と同じスペック（二刀流）、機体色も同じですが『絢爛舞踏』はありません。

宜しければ11日18時までに「この名前はどうか？」と思われる方はメールをお願いします。

1話 #6 姉と妹

一兄の勉強の成果は少しずつ出ているようです。予習や復習を続けた結果ですね。

キーンコーンカーンコーン

「織斑くん「さん」」

「はいはい！質問！」

山田先生と織斑先生が教室を出るなり、女子はスタートダッシュをきめ、一兄と私席にきます。

「あ、あのそんなに來られえても困ります」

さすがに私もこの状況には引きますよ……

……誰ですか？整理券を配ってる人は！しかも、有料？

これは『お話』が必要ですね。

「ねえ、織斑さん。千冬さまは自宅ではどんな感じなの？」

「はい？先生ですか？先生は家では結構だらしー」

パァ〜ン!!!

痛いです…誰ですか？私の頭を叩く人は！って一人しかいませんね。

「休み時間は終わりだ！席に着け小娘ども」

チー姉さん…

「織斑先生・・・」

「なんだ？織斑妹…」（や、やばい怒ってる）

「申し訳ありませんでした」

私は『ニツコリ』と笑って頭を下げます。もちろん、目は怒ってますよ。

「わ、わかれば良い。席に着け」

チー姉さんそんなに怯えなくてもいいじゃないですか。みんな不思議がってますよ。

「授業に入る前に、織斑兄妹。お前たちのISだが準備に時間がかかる」

「…どうしてですか？」

「予備がない、学園で専用機を用意することになった」

「せ、専用機!? 一年のこの時期に?」

私は、ハツとして、気づきませんが、一兄は気づいてないみたいです。すかさず、ちー姉さんに思念をおくりします。

『姉さん・・・』

『春ちゃん!? さっきのはー』それは後です! 「…あう、どうしたの?」

『専用機ってまさか東さんが絡んでるんですか?』

『やっぱり春ちゃんには隠せないか…そうだよ、東が絡んでる。そして、一君と春ちゃんの機体、そして、篝の機体もつくってる』

『この事を篝ちゃんは?』

『知らない』

『そっか、ありがと、ちー姉さん。それとあとで「おはなし」があるからね』

『あう、わかった・・・』

私が姉さんと思念で話をしているあいだ、他の生徒は「いいなあ」とか「私も早く欲しいな」とかいう声が聞こえた。

ISは世界に467機しか存在せず、そのコアは篝ちゃんのお姉さ



ん、篠ノ之 束さんー」篠ノ

之博士』しか作れないし、その束さんはもうコアは作っていない。

けど、その束さんが私たちの専用機を作っている。と言うことは、468、469、470番目の機体が作られている事になります。

一兄が教科書を音読し終わって、先生が補足説明をしているところに、一人の生徒が質問をしました。

「先生、篠ノ之さんってもしかしてー」

「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

ちー姉さん、個人情報ばらしているんですか？・・・ほら、案の定クラス中から『ええ~~~~~!!』

と声上がり、篝ちゃんの元にみんなが集まります。

「篠ノ之さん！博士ってどんな人！？篠ノ之さんも天才なの？」

「今度ISのー」あの人は関係ない!!』」

篝ちゃんは大声をあげ、教室から出ていきました。

「篝ちゃん」

私は後を追い、一兄はちー姉さんに抗議を言おうとして、頭を叩かれていた。

場所は屋上

はあ・・・どこへ行っても姉さんがついてくる、私は私なのにどうしてだ！

「篝ちゃん？」

「春ちゃん・・・」

篝ちゃんは力なく笑っています。

「私はダメだな、未だにあのあの人の事をー」

「姉さんをあの人なんて言うてはだめですよ」

篝ちゃんを抱きしめ背中を擦ります。

「お互い、有名な姉を持つと大変だね」

「そつだな・・・」

そう・・・私たちはお互い有名な姉が居る

そして、その姉たちによって、こうしてまた会えた。

それにしても・・・この膨らみは反則です（泣）

「篝ちゃん・・・」

「なんだ？」

「胸…反則です」

「な、なにを言い出す!」

篝ちゃんは顔を赤くして怒ります。

「何時もの篝ちゃんにもどりましたね」

「もう…春ちゃん、ありがとね」

私は扉の方をみて「一兄、そろそろ出てきたらどうですか?」

「「え?」」

一兄は驚きながら扉からでてきました。

「箒…」

「な、なんだ」

「その…なんだ、気にするなよ?」

「一兄、もっと気の利いたことを言えませんか?」

「すまん」

一兄は頭をかきながら謝りますが、私が「これだから、一兄は!」  
と言っていると箒ちゃんがそのやり取りをみて笑ってました。

「箒ちゃん…笑い過ぎ」

「ごめん、ふたりを見ていたら、可笑しくて」

私は思念で『一兄が好きって事一兄にいいですよ?』

「それはダメだ!」

「ど、どうした?」

「なんでもない!」

全く、好きなら好きって告白すればいいのに、もたもたしていると  
ほかの子にとられてしまいますよ?

私は箒ちゃんに近づき小声で「私は箒ちゃんのみかたですよ」って  
言ったら箒ちゃんは驚いていました。まあ、もうしばらく一兄は渡

しませんけどね。

「そうだ、一夏、春香、セシリアとも決闘まで、私と特訓しないか？」

「おっ、良いな。久しぶりに箒と竹刀を交えるか。なあ、春香？」

「そうですね。なにもしないよりは良いですね」

「お前たち剣道を続けていたのか!？」

「おう」「はい」「」

「そうか…そうか!」

箒ちゃんは私たちが辞めていなかったのが嬉しかったのか、笑みが絶えませんでした。

「なら、早速今日の放課後から、はじめるぞ!」

「はい」

こうして、セシリアさんとの決闘まで、3人で特訓したのでした。

〈余談〉

「春ちゃん！許して〜」

「ダメです。許しませんよ。ちー姉さん。いえ、『お・り・む・ら・せ・ん・せ・い』」

「春ちゃん〜んごめんなさ〜い」

「だめです」「ニッ」

「い、いや〜い〜い〜い〜い〜い〜」

その日、1年生寮に女性の声がこだました

## 1話 #6 姉と妹（後書き）

悠「はい、これで1話がおまりました」

春「こんにちは。ねえ悠月さん？」

悠「ん？どうしたの？」

春「原作では兄さん剣術やめてますよ？」

悠「うん、けど、このISでは辞めてないよ。原作とは話を変えてるよ。」

春「そうなんですな」

次回、第2話「代表決定戦」です。  
宜しく願います。

2話 #1 クラス代表決定戦(1) (前書き)

悠「2話です」

春「です」

悠「決定戦です」

春「です」

悠「けど、今回はピットでのやり取りです」

春「………なんで?」

悠「うーん、なんとなく?」

春「こっちに来てください」(ニッコリ)

＼(。ロ＼)ココハドコ? (ノロ。(ノアタシハダアレ?

春「馬鹿な事してないで、こっちに来なさい!」

悠「いや~~~~~」

第「良いのか一夏」

一「…俺は知らん、見てない」

春「全く…?どうしました?二人とも?」



「一、篇」「なんでもない!」「

春」?」

「一、篇」それでは、どうぞー」「

## 2話 #1 クラス代表決定戦(1)

この1週間、私は一兄と篤ちゃんと3人で特訓しました。内容は、剣術をしたり、打鉄でISの動きを確認したりとまだ見ぬ私のISを待ちながらひたすら、特訓しました。

そして、セシリアさんとの対決の月曜日がやってきた。

「篤…」

「なんだ？一夏」

「なんか春香が浮かれている様に見えるんだがー」

「…気のせいだろ」

『……………』

「なんか言ってくれ篤」

「一夏こそ何か言え」

「……………」

「何故、そこで二人とも黙認なんですか？」

「一兄は〜」と言いかけた時に山田先生がピットに駆け足でやってきました。

「織斑さん、織斑さん、織斑さんっ!」

山田先生そんなに呼ばなくても私はここにいますよ。

この人は本当に先生なのでしょうか？

一兄が『はあ』とため息をついたあと

「山田先生、落ち着いて下さい。はい、深呼吸して」

「えっ？は、はい。す〜は〜、す〜は〜」

「そこで息を止めて」

「うっ」

山田先生の顔があっという間に赤くなりました。

「目上の人間で遊ぶな馬鹿者」

パーンツと出席簿アタックのいい音がこだました。

私もやってみたいです。

「千冬姉ー」

パーンッ！

「織斑先生と呼べ、学習しろ。もしくは死ぬ」

うわあゝ ちー姉さん貴女は教育者ですよ？良いんですか、そんな事言つて。

「安心しろ、お前たちだから言っただ」

人が思つてる事を当てないでください。

「お、織斑さん。来ました、届きました貴女の専用IS機」

「織斑妹、すぐに準備しろ。ぶつつけ本番でものにしろ」

「春ちゃん、特訓の成果をみせてやれ」

「春香、織斑家の人間だ。思う存分やってこい」

「えっ？ あっ！はい？」

「「「早く！！！！！」」」

ちー姉さん、一兄、篤ちゃん、山田先生の声が見事に重なります。  
… 凄いな

暫くして、ピットの搬入口が重い音を立てながら開いていく。

そこには、『赤い』ISがいた。

「綺麗…これが私のIS…」

「そうです。これが織斑春香さんの専用IS『深紅』（しんく）です」

見上げている私に山田先生はISの名前を教えてくださいました。

「深紅―私だけのIS」

「織斑妹、準備しろ！」

「はいつ！」

私は深紅に『これから宜しくね！』と声をかけ準備をした。

## 2話 #1 クラス代表決定戦(1) (後書き)

春「今回はここまでで。私のISは『深紅』と言う名前になりました」

悠「いろいろと案はあったんだよ？メールを貰ったりしたし」

春「そうですね。皆様ありがとうございました」

悠「深紅、名のとおり深い赤色をした機体だよ、次の回で深紅のスペックをかきますよ」

春「たのしみです、一兄と篝ちゃんのISは？」

悠「一緒に来てるんだけど、まだ出せないんだよタイミングがね・・

・原作にそりつつ違う感じで進みたいから」

春「ふくん、頑張ってね」

がんばります。

## #2 クラス代表決定戦(2)

2話 #2 クラス代表決定戦(2)

深紅に触れた時、私は不思議な感じに見舞われた。なんて言うか…『懐かしい』そんな感じ。

私は深紅に身体を預け目を閉じる、暫くしていたら深紅がシステム構築をはじめめる。

「春ちゃん、ISのハイパーセンサーは問題なく動いているわね。どう？気分は悪くない？」

プライベートチャンネルでちー姉さんが声を掛けてくれた。

「大丈夫だよ、ちー姉さん。行ける」

「そう、私の妹だもの大丈夫だよね」

ほっとしているのか、安堵した顔だった。ハイパーセンサーがなかったら分からなかったと思う。意識を一兄と箒ちゃんに向けると二人が心配そうにみているのがわかった。

「一兄、箒ちゃん。行ってくるね」

「ああ、勝ってこい」

深紅をゲートへ進めていく間、フォーマットを行っている。

暫くは逃げの戦いかな…

こんな事を考えながら、セシリアさんが待っているアリーナへ向かった。

「逃げずに来ましたのね」

セシリアさんは腰に手てて待っていた。

「セシリアさん……」

「なんですの？」

「下着みえていますよ？」

「え！？本当ですよ」「嘘です」あ、あなたねえ！」

「大体、ISスーツきて、今ISを展開しているのですよ？」

「……………」

セシリアさんはプルプルと震え

ブル・ティアーズ  
警告。敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認……

「もう、許しません！覚悟なさい！」

レーザーライト（スターライトmk？）を撃ってきた。

「うわあ！」

バリアー貫通、ダメージ15。シールドエネルギー残量545。

ダメージレベル低

「いたた〜」

「よく避けましたわね、次はこうはいきませんわよ。さあ、踊りなさい。わたくしと、ブル・ティアーズが奏でる円舞<sup>ワルツ</sup>で！」

敵IS、ビット状兵器展開！攻撃体勢

2つビットが深紅に向かって攻撃を始める。

「おっと！」

私は何とかビットからの攻撃をよけてかわすけど、まだ機体が『初期化』『最適化』が終わらない。

「避ける事しかできませんの？」

「五月蠅いです！」



何か武器は…

現在展開可能武器、ビームナギナタ

薙刀ですか、無いよりましです。とか考えている間にもセシリアさんは攻撃を仕掛けてくる。こうなったら、一か八か！

「せりゃああああ！」

ドォーンッ！

私は攻撃の間を潜り抜け、ビットに向かって薙刀を振りビット1機ずつ撃破し4機すべて破壊した

「なんですよっ！」

「決めます！」

薙刀を構え、セシリアさんに近づく。その時セシリアさんは“にやり”と笑いつて

「かかりましたわ。B・Tは6機あってよ！」

危険！実弾型ビット兵器展開！  
しまった！罠ですか。

ドカアアアアアン！！

ドカアアアアアン！！

「「春香！」」

「機体に救われたか」

「「え？」」

「見てみる」

千冬姉がモニターを見る。と言うから目を戻すと、そこには深紅の名に相應しい『赤い』機体があった。

S i d e o u t

「フウ… やつと私だけの機体になりました」

「な！まさか貴女！初期設定で今まで戦っていましたの！？」

「そうですよ」

セシリア s i d e

「そうですよ」

そうですよって！この人はそんな機体で私と戦ってB・Tを4機も撃破されたというのですか！

『いきますよ。セシリアさん！』

春香さんは薙刀、刹陽<sup>せつよう</sup>で攻撃を仕掛けてきました。わたくしは、近接武器を出すのは得意ではありません。

・・・ああ、私は負けるのですね

この時セシリアは負けを確信した。

S i d e o u t

セシリアさんのブルー・ティアーズに刹陽で攻撃を仕掛け、試合終了のブザーがなった。

『勝者！織斑春香！』

第3アリーナは二人の健闘をたたえた拍手がなりやまなかった。

## #2 クラス代表決定戦(2) (後書き)

変な感じで仕上がってしまいました。

『が！後悔しても仕方がない！』

批判は…受け止めるよ。けど、きついのは勘弁かな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0316r/>

---

IS ~インフィニット・ストラトス~ もう一つの世界

2011年5月26日15時08分発行